

ホトトギス

The illustration depicts a Japanese butterfly (Hoto-togisu) with white wings and pinkish-red markings, perched on a large green leaf. Below the leaf, there are clusters of flowers: some are bright red with white centers, and others are small white flowers. The background is a light, textured greenish-yellow.

十月号

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日開始発行
昭和二十八年七月一日発行
第百十五号



俳句随想〔四百十二〕

汀子

季題を正しく使うのは俳句を勉強する過程で大切なことだと思う。でも、このように使うことで季題が強調されるのではという考えをもって使う人もいる。例えば、耕は春の季題であるが、春耕としなければならぬと思つて使われている人もいる。しかし、耕は春の季題。秋と冬の耕は秋耕、冬耕としなければならぬ。彼岸は春の季題である。春彼岸ではなく、秋は秋彼岸としなければならぬ。春の季題で霞を春霞とはしない。歳時記をよく読むことでそれらを知ることが出来る。また、言葉として病後の事と思つて、予後を使うのは間違ひである。予後は「病後の予測」である。晩夏、新樹、に光をつけて「晩夏光」「新樹光」と表現している俳句を見るが、晩夏、新樹と使うだけでもそれらの光を感じるから態々光と入れない方がよい。

字の正しい書き方はこれまでの思い違ひがあることもある。例えば、お洒落の酒を酒と書いてあるのは間違ひである。

私は「聖五月」も取らない。何故「聖」かというと、カトリックでは「五月」、は「聖母マリアの月」となつていたので、いつか「聖五月」と使われているのであろう。そのことを知つて使うのであればいいことはい。

送り仮名も難しいこともある。「萎える」を「萎へる」とするのは間違ひである。「堪える」「耐える」は「堪へる」「耐へる」とおくり、「絶える」は「絶える」でなければならぬ。少しづつ文法を勉強して私はやつとここまで辿りついた。

旬日記 汀子

平成二十七年十月三日 芦屋ホトギス会

六甲の山近づけて小鳥来る
稜線の語る全き秋の晴
会場に揃ふ人数秋の晴

十月四日 下萌句会

稜線に雲置き初めし秋の山
抜けてゆく畦道ばつた従へて
病む人の消息伝へ冬近し

十月五日 ロイヤル吟行会

爽やかな旅のはじまる目覚かな
快晴の城山仰ぎ島の秋
えにしとは思議爽やかなる出逢ひ

十月六日 中国ホトギス同人会

旅多き秋の一日を島にあり
影恋うて日差を恋うて秋の風
日本海色深き紺秋めきぬ

五年前來たる記憶を結ぶ秋
爽やかや日本海の色とこそ
秋の地の記憶を結び行ける秋

十月七日 中国ホトギス俳句大会

秋風の渡る御墓所を去り難く
晩秋の萩の夜明けの遅くとも
曲る場所秋草活けてある案内

十月八日 長谷川權様へ

快晴の二日の旅の露を踏む
鱗雲より頂きし元気かな

十月十二日 悼 和田克司先生

偲びても偲びても師の逝きし秋
もう聞けぬ子規のあれこれ秋深し
十月十三日 大阪倶楽部

今我に力あるとて露けしや
うそ寒といふほかはなし転びたる
迷惑をかけてしまひし秋思かな
十月十三日 綿業倶楽部

十月十五日 清交社

露けしや転びしことももう過去に
時間とはいやしてくるる露踏みて
野菊叢歩く楽しみあり乍ら
十月十五日 クラブ合同

十月二十一日 夏潮句会

怪我といふ油断のありて秋の暮
色鳥の來たる我家に退院す
助手席に和服しつとり秋の暮
助けくれたる人は誰秋の暮

十月二十一日 きさらぎ会

松手入済みて青空降りて來し
露けしや成行話し終へしとき
秋風に転びしことも幾そ度
露寒の仕事は待つてくれざりし

怪我せしを早々葛湯溶きくれし
添水鳴る忌日近づくと寿福寺に
十月二十一日 木の実落つ音の静寂に包まるる
冷やかに告げねばならぬ艮齋ありて
やや寒き朝の氣纏ひ上京す
又もとの健康戻りつつ秋を
秋惜む心やうやく取戻す

十月二十三日 アネモネ句会

露寒といひ快晴の一部分
健康を取り戻しつつ秋惜む
露寒に癒えて行く日々ありしこと
再可動せしも旬日秋惜む
秋灯の明るき下で待つことに
十月二十四日 句会と講演の会

十月二十六日 年尾忌

頬白と分る距離まで近づきし
スケジュール混みてほどけて露寒し
怪我癒えて行く日々とても露けしや
行く先を決めずに出掛け紅葉狩

工業倶楽部 出句

やや寒きことも心地のよき時も
川浴ひの桜紅葉は海へ伸び
快晴のつづきやや寒ゆるびをり
十月二十三日 時雨句会

客二人増えて準備の走り蕎麦
又踏んでしまひし木の実前うしろ
腹立ててならぬ転んでならぬ秋
怪我癒えてはや晩秋の旅二三
露霜の朝の早発ちとはなりぬ

十月二十九日 摩耶山俳句大会

快晴といふ冷やかな山氣満つ
とり敢へず間に合ひしこと露寒に
快晴を山氣に込めて摩耶の秋
十月三十日

十三夜 仰ぎ 忌日の心とす
風渡る尾花の山路行く忌日
年尾忌に告げねばならぬことあり

十月二十九日 時雨句会

十月三十日

十月三十日

十月三十日

十月三十日

十月三十日

十月三十日

十月三十日

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十七年十月一日 蕉心会

菊月や心変りは空にあり
蕉像の肩の傾斜に小鳥来る
夢の会ひませう今宵の寝待月
水面ちよと凹ませてある秋の雨
コスモスの雨を拒んである乱舞
長月や旅暗くなる重くなる
兵の如き一本秋旅へ
馬肥ゆるこの体型を維持せねば
十月一日 徳源寺句会
東京の雨を発ち古都天高し
爽やかに画竜点睛説かれたる
国宝の鐘秋声を奏でたる
十月二日 葎屋ホトトギス会
梵鐘の一打身に入む古都の宵
赤い羽根つけて句心里心
妙心寺小鳥も庭の景として
十月四日 野分益局例会
むくの空星の空へと誘へり
むく群れて地球重たくなりけり
むく飛んで黙録めく空となり
末枯や葎屋マダムの庭の黙
十月四日 青嵐会青嵐例会
種採つて花壇眠たくなつてをり
今年酒酌あめば横川に一忌日
新酒酌む嗚呼泊雲よ余花朗空
秋の蚊を狙ふ六十余の瞳
十月五日 カリツク新聞選者時
聖堂の見下す川の水澄める
十月六日 中国ホトトギス同人会、大会
木の実落つ松陰の世を奏でつつ

名譽主幸うそ寒く立つ隠居部屋
香煙の大秋晴に吸ひ込まれ
松陰の露明けき時代語る墓
灯火親し我が家の朝体も語る僧
秋蝶の風拒み日を恋ふ高き
何もかもこの秋天に還したく
十月八日 土筆会

柳散る夜の銀座も遠くなり
石榴爆ぜ山気放つてをりにけり
田の神に注ぎ一献秋祭り
風に揺れ日に乾きゆく稲架親し
十月十日 千代女全国俳句大会
加賀といふ昔を今に初紅葉
爽やかに千代女の里の目覚めかな
十月十三日 むさし野吟行会

娘の職場指呼に爽やかなる一会
露踏んで今日は横浜明日横川
秋撮棒伸び行く先の天高橋
秋潮にベイブリッジの揺るぎ無く
十月十四日 西の虚子忌
澄む水を引き絞り句碑甦る
十月十五日 登高会

秋深し西に東に忌を修す
横川路の鐘の余韻に小鳥来る
峰寺小鳥は虚子の化身とも
十月十七日 北國文芸選者時
十月十七日 北國文芸選者時
十月十七日 北國文芸選者時

十月十九日 朝日カルチャー若草句会
新酒とは祝勝会にこそ似合ふ
スコッチの水からりと秋の声
新酒酌み新監督の話など
秋の落つビブラソんめくアスファルト
十月二十四日 ホトトギス社句会

紅葉狩千代田区千代田一番地
類白の目覚めさせたる森の精
十月二十五日 青嵐会東京例会
朝寒に集へば和む一句会
秋惜む大いなる忌に思ひ馳せ
行秋や募る忌心祝ぎ
身に入むや又も転んでしまふ人
十月二十五日 野分益局東京例会

むくの群引つ張つて裏返る
夕闇の先づ末枯に軸を歪ませり
十月二十六日 年尾忌
忌日寺小鳥余白を奏でゆく
油点草忌心ほどに揺らす風
十月二十七日 若水句会

野猪と人距離の縮まる港町
木道の尽きる離り蘆原となる
虫送闇に吸はれてゆく祈り
猪に里山遠魅侍らせ虫送り
十月二十八日 目黒学園句会

冷まじや身近な訃音聞くにつけ
後の月仰し歪め忌心整へる
冷まじや身近な訃音聞くにつけ
後の月仰し歪め忌心整へる
冷まじや身近な訃音聞くにつけ
後の月仰し歪め忌心整へる

十月三十日 田鶴 五百五十号祝賀前日句会
行秋のこの賀に背広新調す
賀に参ず初雪の富士窓に嵌め
播磨吉備三河野山の錦越え
秋惜む惜むこの野く賀を称え
十月三十一日 田鶴 五百五十号祝賀会
祝ぎ心錦秋越えて播磨路へ

雑詠 廣太郎 選

蟻地獄奈落の底にある秘密 前橋 伊藤涼志
 見せかけの極楽作り 蟻地獄 同
 一滴の水も欲せず 蟻地獄 同
 万幹の竹 吃り出す 青嵐 神戸 涌羅由美
 青空を切り裂いてゆくほととぎす 同
 蛆として白き命を賜りぬ 同
 花びらのしとねとなりし草若葉 東京 大久保白村
 まだ奥へ咲くぞ咲くぞと花吉野 同
 花の山美女の手招き恐ろしく 同
 ワイン飲み尽くしこれより蚤の夜 神戸 藤井啓子
 数式のすいすい解けて風五月 同
 白服の肩にふはりとカーディガン 同
 こつてりと南京町の薄暑かな 八尾 山下美典
 風重く流るる 卯月 曇かな 同
 昼顔のまだ醒めぬ色 ゆする風 同
 たんぽぽのわた青空のあをとる 岡山 伴 明子
 たんぽぽ黄けふの地球の色きいろ 同
 青空と新緑と新緑と風 同

胸せに期待やバレンタインの日 大津 石川多歌司
 名残なほ尽きぬ残花や歩を返す 同
 地震続く地にも新緑なる未来 同
 太陽を燃え立たせぬる牡丹かな 福山 竹下陶子
 緋牡丹の源氏の君を待つごとく 同
 松蟬や造化に帰らねばならぬ 同
 曇天の葉桜といふ重さかな 東京 橋本くに彦
 池静か新樹明りを刎ね返す 同
 絵すだれを境界として客間かな 同
 秋日傘たたみて風を仰ぎけり 同 今井肖子
 仏像の耳のうしろの秋の影 同
 仲秋や階段空へ途切れたる 同
 道明寺なればいたたく桜餅 龍ヶ崎 今橋眞理子
 深々と闇ぼんやりと春の星 同
 木洩れ日を日ざしを摘んで薬狩 同
 潮騒の届くめし屋の穴子丼 神戸 山田佳乃
 地車を押し押し押しと若頭 同
 みよしのに来よと便りや笹粽 同
 風繫ぐことを大事に蔦青む 香川 湯川 雅
 塗立の上に塗重ね青葉山 同
 はえの消し残す足跡波が消す 同
 助手席に茅花流しを感じつつ 神戸 千原叡子
 軽暖や阿波訛なる名披講 同
 虎刈のやうに凸凹若葉山 同

雑詠句評（九月号より）

保佳・むつみ・肖子

眞理子・静龍・とほ歩

憲明・中正・葉

美奇・廣太郎

余震なほ指先にある春の闇

熊本 岩岡中正

今度の熊本地震の最中にある作者の偽らざる体験の一句とみることが出来る。いつ止むとも知れぬ余震の不安と恐怖の作であるが春の闇という季題をこれまで深刻にとらえた句は余り類が無いと思う。指先にある春の闇という表現はさすがだと思ふ。地震の災害を受けたものの御一家が無事であったことは何よりのことであった。（保佳）

平成二十八年四月に勃発した熊本池震で被災された作者である。いつまでも余震が続いているという前代未聞の揺れのパターン

ンである事も報道されているが、その余震をこのような感じ方で表現されておられるのが痛々しく感じられる。季題を通して作者の心を察するに余りある句である。（廣太郎）

夜桜や明日なき如く咲き誇り

龍ヶ崎

今橋眞理子

東山魁夷のあの有名な円山公園の夜桜を描いた一枚の絵が眼前に広がる。土午の醍醐の桜もしかり。桜並木もさることながら一本の大木の桜は威厳と妖艶な雰囲気を醸し出す。特に夜桜となるともうこれで尽きるかの如く最後の命を振り絞って咲いていると思つたのだろう。「明日なき如く」の措辞は今のこの姿を見て下さいといわんばかりに思えた作者の思いが伝わる。桜の精気というか靈気が満ち溢れ、最後の命に呑み込まれんばかりに茫然と立ち尽くしている作者の姿がうかぶ。まさに「夜桜」の姿である。

（むつみ）

毎年日本列島を縦断するように咲く桜の花であるが、その時期は地方によっても差があり、その年の短い花期をそれぞれの地域で人は愛するのである。さくらの名所と言われている場所では尚更心が昂り、その短い花の命を惜しむかのごとく愛でているのである。そんな様子がひしひしと伝わってくる。（廣太郎）

天地有情

女子選

夏になり臨機応変なりし白
 夏帽子似合ふといふは遊び人
 愛されてゐるから綺麗薔薇もまた
 月ある夜月なき夜も蛍の夜
 これが冬怒濤東尋坊を噛み
 柱状節理板状節理冬怒濤
 寒見舞文字の歪みも気にしつつ
 初風や六甲風宥めつつ
 明易や花鳥諷詠詩の絆
 諷詠に年齢はなし明易き
 今年限り今年限りと集ふ梅雨
 一つづつ老いて面々涼しき灯
 物の怪を鎮め吉野の夜の朧
 み吉野の朧を人か獣か
 通さねばならぬ意地あり鉄線花
 草笛を吹く一芸と言へるほど
 夏鯉の尾鱗に余震ありにけり
 余震やや遠ざかりたる豆の飯

神戸 後藤立夫
 同 和 和田華凜
 同 後藤比奈夫
 同 稲畑廣太郎
 東京 同 葉
 長岡 安原 葉
 同 同
 東京 今井千鶴子
 同 同
 相模原 木村享史
 同 同
 神戸 三村純也
 同 同
 熊本 岩岡中正
 同 同

引き寄せる香も彩りも薔薇かな
 軽暖の木洩日の先海の色
 沈みても植田に生きる力あり
 朝五時に峡へ届きし桜鯛
 夏服になつて若やぐ心ふと
 母在さず母ともならず母の日を
 薄紅葉して曇天にそよがざる
 割算に生るゝ永遠鱈雲
 卯浪立つ水平線の高くあり
 古茶淹れて特に話題のなき夫婦
 飛び方のやはり燕でありにけり
 ゆく春や娘二人を嫁がせて
 道草のかの日に戻る麦の秋
 旅一人茅花ながしを道連れに
 この家もひとり暮しや実梅落つ
 今日もよく働きました夕薄暑
 梅雨の航とは全方位視界ゼロ
 梅天の降り来て沖を奪ひけり

東京 河野美奇
 同 同
 石川 辻口八重子
 同 同
 東京 高濱朋子
 同 同
 同 今井肖子
 同 同
 袋井 湖東紀子
 同 同
 龍ヶ崎 今橋眞理子
 同 同
 宝塚 水田むつみ
 同 同
 東京 山田閨子
 同 同
 奈良 古賀しぐれ
 同 同

幻の一文

稲畑汀子

毎月送られてくる俳誌を初めとする本の整理は、もう自分では出来なくなつて久しい。

今の我が家は、昔の配膳室だった場所を書齋に繋がる可動性の本棚を置いて書庫にして、その地下にも同じスペースの固定式本棚を作り、溢れんばかりの書籍を整理して来た。

阪神淡路大震災の二年前、姑が亡くなつた。千坪の土地を亡夫の四人の兄弟で分けてそれぞれの責任で使うことになり、鎌倉に住む義姉の希望でその土地を私が買取り、そこへ虚子記念文学館を設立する事が出来た。土地代は分割して義姉に返し続け、払い終えるのに五年の歳月がかかったが、十歳年上の義姉はすっかり払い終えたその年に亡くなつてしまつた。「母は大変喜んで亡くなりました」と言ってくれた彼女の長男の言葉に私は安堵した。

今の我が家は、昭和十一年に姑の好みで建てた大きな家の表の部分を南東に曳いて来たものである。亡くなる前に姑からこの家を残して大切に使うと遺言のように言われた願いを少し果たせたように思っていた。

毎日送られて来る書籍は膨大な数である。すでに昔からの大切な書籍の整理は家の改築の後に私がして、大事なものは一番奥の本棚の下の一割を使つておさめることにしていた。

私が俳句の虜のようになっていた青春時代の俳誌「青」、「木兎」、「玉藻」、そこには私の関係する記事が載つていたり、私を書いた拙文もある。若かりし日々が甦る手紙を包んだ風呂敷、熱心に通つた書道のお稽古の残骸、プライベートで習つた英語、仏語などの辞書やテキストを包んだ風呂敷。残して置きたい手紙などがそこにおさめてある。

昔のことを調べる時は、地下に降りて、本棚から破れそうになつた。べらべらの雑誌を抜き出して読み、済んだら大切に元に戻して来ていた。

相変わらず送られてくる雑誌のうち、ホトトギス系の大事なもののだけをそこへ片付けるのに代わり合つて手伝つて下さる方があつて、お願いして久しい。甲南学園を定年で辞められた先生も引き続き手伝つて下さるので助かつている。

私は用事がなければ中々書庫に降りて行くこともないのであるが、調べ物をするときには書庫に籠つて調べることもある。

幅広い廊下の下の空間へ降りられるようにして、そこにも当分使わないものを納めるために棚を作つて貰い、その棚もすでに満杯になつていた。

調べ物をするために久しぶりに書庫の地下へ降りた。足の踏み場がないほど雑誌が括られて埋まっていた。整理をして下さる仲間達はときどきと処理されるので、何とか書庫が保たれているのである。

「あれ？」

見たかった俳誌「青」の一例が消えている。そこには手紙などを包んだ風呂敷だけが置いてあるではないか。

「えー！」

私は自分だけがその一例が大事なものだと思っていて、整理をしに来て下さる人達には言ってなかったことに気がついた。何処かへ移動したのかも知れない。誰彼に聞いて見たが、そこは触つてないという。誰も知らないという。

隣の虚子記念文学館に尋ねると、大沢さんがすぐに何冊か古い雑誌を持って来てくれた。

俳誌「青」に神田敏子さんという方がいた。深い謎に包まれた美人で聡明な彼女は「敏子の頁」を「青」主宰の爽波さんから委ねられていて、毎号「青」の斬新な評論を書かれていた。私が読んでみたいと思うて探していた評論を次々見ることが出来た。もう一度読み返してみたいと思った一文も出て来た。

「汀子さんの句」「感覚的なファンタスティックと、おのずからなる体得によるたしかな客観描写の融合が如何にも豊かな感

受性でこれからの俳句の一つの鮮度を感じさせさせている。そして若さという柔軟性でなくやがて精神年齢の美しさを加えて詩魂の濾過がどの様に透明な深度を示すかと言うことが汀子さんに残された宿題になっている。以下略……」

何となく気になっていた若き日の胸のつかえが少し下りた気がした。

